



(大 甕)

福島・泉廃寺跡 いずみはいじ

- 1 所在地 福島県原町市泉字館前
- 2 調査期間 第一〇次調査 一九九八年(平10) 六月～八月
- 3 発掘機関 原町市教育委員会
- 4 調査担当者 荒 淑人
- 5 遺跡の種類 官衙跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代・平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

泉廃寺跡は阿武隈高地から太平洋に向かって流れる新田川によって形成された河岸段丘北岸の縁辺に位置する。発掘調査は一九九四

年から行なわれ、二〇〇三年までに一九次にわたる調査が行なわれている。その結果、陸奥国行方郡衙跡であることが判明している。これまでの調査で郡庁・正倉・館・運河状遺構が確認されている。郡庁は建物の主軸方位が真北方位より

東に約一六度偏するⅠ期、真北方位を向くⅡ・Ⅲ期からなる。郡庁の西側隣接地には正倉が展開し、新旧二時期の正倉院区画溝が確認されている。これら二時期の区画溝は真北を向くことから、郡庁Ⅱ期・Ⅲ期に対応する可能性が高い。区画溝の内部には地業を有する礎石建物と掘立柱建物が造営され、礎石建物の中には円丘状盛土地業を伴うものがある点は大きな特徴である。

今回の調査は農業基盤整備における確認調査で、遺跡の東端に位置する館前地区で実施したものである。調査後は盛土工法により遺構の保存が図られた。館前地区は、調査以前から各種瓦が多量に出土することで知られており、上述の郡庁、正倉などとは明らかに異なった特徴を有する。同地区の評価は今後の調査を待たねばならないが、陸奥国行方郡衙附属寺院跡と位置付ける見解が有力である。

調査の結果、整地層、掘立柱建物四棟、溝、井戸が検出され、木簡、軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦、埴、鬼板、中世陶器が出土している。整地層は地区の西半に広がっており、多数のピットが掘り込まれている。整地層にカワラケや陶器が含まれていることから、中世の所産である可能性が高い。調査区の東半には整地層が見られず、掘立柱建物四棟、井戸二基、瓦溜一基が検出された。これらの遺構は柱掘形や井戸底面からの出土遺物がなかったため、厳密な時期比定はできないが、古代の可能性が高い。掘立柱建物は建物主軸が真北から約三〇度東に振れる二間×三間の建物(SB1)とほぼ真北

を向く二間×八間の建物（SB二）が重複し、後者が前者より新しい。更にSB二は瓦溜（SK二）と重複し、SK一より古い。瓦溜からは軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、塼、鬼板が出土した。

木簡は、これらの遺構の東側に位置する二基の井戸のうちのSE一から出土した。SE一は検出段階の平面形は正円形で、直径一・八m、深さは二・五mまでで調査を終了している。木簡は約二・〇m付近の堆積土中から出土し、ほかには平瓦、鹿角、骨（鹿？・鯨）などが出土している。木簡はこれらの遺物とともに井戸内へ投棄された可能性が高い。

8 木簡の釈文・内容

(1) ・□□」

・□□位

(118)×35×5 019

上端は欠損しているが、下端、両側端は原形を留める。墨書は両面にあるが、墨痕自体は失われており、文字は風化を免れた文字の浮き上がりによって確認される。

表面は中央に縦方向の二次的なケズリが及び、墨書自体の判読はできない。二文字が書かれていたと推測される。裏面には二もしくは三文字が書かれている。最後の文字のみが判読できる。

木簡の釈読にあたっては、山形大学の三上喜孝氏、奈良文化財研究所の馬場基氏からご教示いただいた。

9 関係文献

原町市教育委員会「泉廃寺跡第一〇次調査」(『原町市内遺跡発掘調査報告書』四、一九九八年)

『原町市史』古代中世編(二〇〇三年)

(荒淑人)

